

二十一世紀はグラフィックの時代だ——こう書けば、「何をいませら」と思う者も、「言語を介した想像力を至上」と憤る者もあるだろうか。一方では、絵画はもちろん写真やコミックなどの表現技術が前世紀すでに隆盛を迎え、他方で、言語が抽象化された思考に最適の手段なことは今世紀以降も変わるまい。だが、こと小説を始めとした「近代文学」にかんして言えば、隆盛の背景には活版印刷の時代があった。「活字」が最適化された印刷技術として文字通り「活」き、印刷物がマスメディアの中心だった時代、技術的な簡便さから活字はグラフィックを圧倒し、人々の伝達と想像力も文字経由のそれを主流としたのだ。そのことが大きく転換するのは二〇世紀、オフセット印刷の実用化以降だ。版の凹凸ではなく製版フィルム表面の親油性・親水性がインクの領域を定める「平版」と輪転技術に基づくオフセットは、印刷物から、文字領域とグラフィック領域の差を失わせた（そもそも「製版」自体が「写真」技術の結果なのだ）。オフセット印刷の実用化からおよそ一世紀、四世代程度の交替を経て、人々は文字を介した想像力の寡占状態を次第に離れ、グラフィックを介した想像力を「取り戻して」ゆく。映画やラジオ、テレビ等の映像技術や音声通信の発達が外堀を埋め、コミック文化の隆盛に象徴されるグラフィック印刷の進歩が内堀を埋めて、文字による想像力は次第に、千年紀のなかばから築いてきた王国の版図を狭めてきた。決定的な変化が訪れるのは、デジタル技術と電子ネットワークへの集約が始まる前世紀末から今世紀初頭にかけてだが、その潮流は百年単位の時間のなかですでに／つねに起き続けてきたのだ。

そのように考えれば、いまこの「現在」においても私たち（の思考や想像力）が変質の途上にあることへの理解は容易となる。モバイル端末や電子メールの普及は、今世紀はじめの限られた期間には「文字を読み書きする量の増加」と捉えられたが、SNS上のコミュニケーションに「スタンプ」が多用され、ブログからTwitterやFacebookへと移行した「投稿」がさらにInstagram等で画像や動画へと軸を移しつつある事実は、「読み書きの増加」が一時的なものではないことを示している。デバイスやアプリケーションの発達が容易化した、画像や動画のコミュニケーションは、「スタンプ」に象徴されるコミュニケーションの意図的な曖昧化も援軍として、「文字の有為」を覆してゆくだろう。他方、テキスト領域で考えても、ライトノベルやエンターテインメント作品等で「セリフ依存型の文字フィクション」が市場を拡大してきたことは、そうした変化と無縁ではない。一見同じ「文字」に見えても認識と解読を軸とする「描写」は歓迎されないが、「そこにある」会話、そのものの「記録である「セリフ」は受容されやすい、という状況を示している（もちろん、いずれ現実の人々が会話すらしなくなる日が来れば、「セリフ」もまた認識困難なものとして敬遠される。いまここで論じる紙幅はないが、今日の「お笑い芸人」のものはや一時的とは言えない隆盛も、そうした言語の受容状況と無関係ではない）。

右のように、「文字」あるいは「言語」の層を解体し再構築可能なものとあらためて認識しなおすとき、私たちの近い将来には、ふたつの方角が見えてくる。

ひとつは、私たちの言語そのものやそれを介した思考がどう変質してゆくかで、たとえば本誌前号に掲載の「物語労働論」を含んで上梓された大塚英志氏の『感情化する社会』（太田出版）の題名が示すとおり、記号ではなく感情の発露あるいは装置としての言語のありかたもそのひとつだ。それを「文学」と呼ぶかどうか（それこそ文学だとする者もあるだろう）はさておき、鳴き声からでも地続きであるようなそれは、確実にこの先も一定の「声」としてあるはずだ。

他方で再発見されるだろうのは、「記号」としての言語のありかたである。描写とセリフが似て非なるものであるように、「それそのものではない」メタ言語的な自己言及性のメカニズムは、「面倒なほうの言葉」「思考に向けた方の言葉」として、「鳴き声」から切り離されてゆく。そして、言うまでもないが、そうした記号性は「言語」に限った特色ではない。たとえば、（ここ）ようやく、今号の企画に触れることになるのだが）篠山紀信氏が『快樂の館』という名前で試みた撮影と展示は、きわめて強い自己言及性を、作品のみならず観る者すべてに強いる。いうなればそれは「言語としての写真（展示）」であり、そこにある快樂は、たとえば「裸体が煽情的である」などといった（どちらかといえば鳴き声に近い）感情とは異なるもの、それこそかつてアラン・ロブ・グリエが『消しゴム』や『嫉妬』で試みたテクニストとそれを読む行為の自己言及性」とも通じ合うものを持っている。だからこそ、篠山の展示はその境界を示すために裸体でなければならなかったし、ロブ・グリエの『La Maison de rendez-vous』は彼のそれまでの作品よりもベタな方向に振られているわけで、そのことは、身体的な「快樂」を記号化する」という行為そのものが伴う倒錯や領域侵犯と、深いところで響きあうはずだ。

市川真人

附記 右のように書けば、今号が、篠山氏による写真と、ロブ・グリエの作品および彼の妻の日記、それらと無関係あるいは関係するエッセイや小説、企画等で構成されている理由は、おわかりいただけると思う（本来ならこんな説明は野暮もよいところだから、不審を持った向き以外には以下は読まなくてよい）。写真とテキストは「挿画と本文」といった関係ではなく、（前半で記した印刷技術の変化を反映した）異質なレイヤーの拮抗と、一見したところの「写真とテキスト」という分割ではない共通性と異質さによる横断線を形成している。再録した「想像の快樂の進歩」は明治二八年、坪内逍遙による本誌の創刊から四年後に掲載された、今日に至るまで作者不詳のテキストだが、いわば現代的な匿名性とも地続きの同論考を読み直すと、二二五年前となりが異質でなすが同質であるのかもほの見えてくる。

こうした号を、一昨年の編集委員制度の立ち上げ時から参加を願ってかなわなかった篠山氏の全面的な協力や客員編集としての企画参加と、編集委員諸氏をはじめとする執筆者各位の理解によって作れたことが、「文学」あるいは「言語」の解体し再定義が行なわれるだろう次の二二五年に向けての一步となるようにと思う。

